

日本鐵工株式会社(資本金五十萬圓内拂込金三十七万五千圓)は船舶用發動機製作を業とし、中村愛作氏を取締役會長とす、以下の重役氏名左の如し。

専務取締役、佐野甚之助△常務取締役、中村一徹△取締役、池田長幸、堀卯三郎△監査役、牧田彌太郎
土屋義直、黛佐馬太

右の内今回の争議に、中心人物となれるは、常務取締役中村一徹氏とす、中村常務は發動機界に相當の聲望を有するの人のにして、もと園池製作所にありて日鐵にも關係し、大正五年夏期まで其顧問たり、次で園池を辭して技師長格となりしが、會社は其營業政策上同氏に切望して大正六年下半年より常務取締役の地位に推しぬ、然れども中村氏は當初より之を好まず、數次辭任を申出でしが會社は之に懇請して氏を常務の椅子より去らしめず、此間の消息として「一徹が居なければ日鐵は立たぬ」と噂せらる中村氏が同社に於ける地位を窺ふに足らん。

中村氏は労働組合主義の遵奉者なるが、嘗て其技師長時代(六年一月)會社の改革と同時に會社に罷工起り、節制なき職工は擅に工場の器具を持ち出し、之を賣却するなど無法の處置多々ありしたため、中村氏は之を痛憤し職工に對して難詰せしことあり、爾來組織と節制ある職工を求めて止まず、此に友愛會に接近するの機會を與へたり、されど當時の友愛會は鈴木氏の專制時代に屬し、偶々鐵工の間には反幹部熱横溢し、之に叛かんとするの狀態露骨なるものありしが、同年秋頃より數次中村氏宅に

て協議を重ねし結果、同十一月始めて職業別組合東京鐵工組合を組織するの域に達しぬ、鐵工組合の生母は、中村氏の外、現に鐵工組合理事長たる増田彌三郎、別記足立事件の首盟たる泉忠其他若干の人々を擧げ得べし。

鐵工組合生まるゝや、友愛會と分離すべきか否かに就き難問題を惹起し鈴木會長の如き深く是を憂へ會計松岡駒吉氏當時の教育部長綿引氏等は數次其協議會に到りて分離の不可なるを説けり、中村氏も亦之と説を同じくし採決の結果は一票の差を以て辛うじて友愛會に留屬と決しぬ、事情斯くの如くして友愛會が大正八年度大會に於て組合の職業又は産業別化を行ふに決せるに先ち、既に職業別化を斷行せる東京鐵工組合は友愛會本部に屬し乍ら常に本部に對する一威力として存し來り、熟練工を網羅し階級意識に富めること現在の各組合を通じて其比を見ざるところと稱せらる、東京鐵工組合成立と共に中村氏は日鐵に於ける會員を率ひて今日まで支部長の職にあり、友愛會大正八年度大會が理事制を採るや鐵工組合に推されて九年度大會に到るまで本部長たりき。然れども日鐵に於ける組合員の数に常に多からず大正九年八月まで職工百卅餘名中五十名以下に過ぎず勢力多く伸び得ざりしたため一日中村氏は日鐵支部の懇望に依り労働者が組合に加入せざるべからざる所以を力説したるため忽ち工場員全部組合に加入したり。斯くて日鐵支部は會社の食堂にありし消費組合を買収して之を經營し一方會社より食堂自由使用の許可を得、會社の許可を得るなくして會社表門に東京鐵工組合日鐵支部